



Title	「ウランは原爆の原料になる。私たちの大地から掘り出してはいけない」：2012年、マルダイへ
Author(s)	今岡, 良子
Citation	モンゴル研究. 2013, 28, p. 23-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ウランは原爆の原料になる。私たちの大地から掘り出してはいけない」

－ 2012年、マルダイへ －

今岡 良子

はじめに

私は、2012年8月にマルダイに行きました。本稿は、その報告です。第一に、なぜ、マルダイに行ったのか？第二に、マルダイはどんなところだったのか？第三に、マルダイに行ったことに対する反応は？という3点についてまとめます。三番目については、次号に投稿します。

まず、「マルダイ」の説明をします。「マルダイ」とは、図1のモンゴルの最も東部、ドルノド県北部に赤い点が集中するウラン鉱山の1つ、マルダイ・ゴル鉱山の名前です。もう1つは、ウラン鉱山群の中心にロシア人労働者の町が建設され、「マルダイ村」と名付けられました。この村は、ダシバルバル郡の管轄にありますが、ダシバルバル郡、バヤンドン郡、セルゲレン郡の境界に位置します。

図1 マルダイ村の位



出 所：What Investors Should Know About Uranium In Mongolia <http://seekingalpha.com/article/313775-what-investors-should-know-about-uranium-in-mongolia>

次に、なぜ、遊牧社会の研究を専門とする私がマルダイに行ったのか？という説明をします。少し長くなりますが、おつきあいください。

2011年3月11日、東北大震災。次々と爆発する福島第一原発を見てしまった時、これからは原発問題に向き合わずに生きてはいけない、と思いました。

3月末、モンゴルのブログ「ゴロムト」 golomt.org が、モンゴルは核廃棄物処分場になると問題提起を始めていました。モンゴルに住む知人が見るようにと教えてくれたそのブログを私は毎日見るようになりました。

5月9日、毎日新聞に「日米が核処分場極秘計画」「モンゴルに建設」という文字が踊りました。モンゴルがトップ記事になるのは、1990年の民主化以来のこと、今回は会川記者のスクープです。事故だけではなく、もともと「トイレのないマンション」と言われ、行き詰まっていた原子力発電。そのトイレがモンゴルに作られる。また、トイレができることによって、原発はフクシマ後も生き延びる。この問題に向き合わないモンゴル研究などありえない。モンゴル研究者に育ててくれたモンゴルの大地と人々に恩返しするのは今だと思いました。

こういうことが積み重なり、モンゴルのウラン鉱山開発、原発建設、核廃棄物処分場建設についてインターネットで知り得る情報を集めるようになりました。日本環境学会や原水禁世界大会の科学者集会、日本科学者会議で報告しながら、現地に行き、自分で情報を集めたいという思いが強くなっていきました。しかし、マルダイに行くことを決めるまで、もう2つの寄り道をします。1つは福島、もう1つは会川記者が処分場候補地として伝えたバヤンタルです。

(1) マルダイに行くまでの福島とバヤンタルのこと

① 福島へ

モンゴルでフクシマの苦しみを繰り返さないためには、福島を自分の目で見て、自分の言葉で、モンゴルの人びとに伝える必要がある。福島に行こう。しかし、どうすれば、福島の市民の声を聞くことができるだろうか？　すると、ドキュメンタリー映画監督の藤本幸久監督が、京都大学原子炉実験所助教小出裕章のインタビュー DVD をフクシマで上映するキャラバンをするので参加しないか、と声をかけてくれました。私は迷わず、スタッフとして参加する返事をし、5月と8月に一週間ずつ滞在しました。

写真1 5月19日の放射線量「福島民報」2011年5月20日付け（撮影：今岡）



上映会場には常に100人を越える人たちが集まりました。DVDを上映した後、A4の感想用紙の裏表に思いを書き綴る市民、上映スタッフに語る市民、心に閉じ込めてきた福島市民の苦悩を受け止める場となりました。

写真2 上映会後の意見交換の様子(撮影：今岡)



当時、「がんばろう日本」キャンペーンの最中でしたが、マスメディアを通じて知ることのできない福島市民の複雑な思いを知りました。ここにまとめておきます。

「福島県全土が放射能で汚染されている」という小出裕章氏の言葉にすすり泣く人がいました。上映後、その人は「これですっきりしました。」その方は、家族で移住について話し合う決心がついたそうです。

「移住したいと思う。しかし、年寄りを置いては行けない。」

「今、避難したら、保証されなくなるかもしれない。」

「すぐに移住した人が、親戚からもひどいことを言われているので、移住できない。」

「爆発の翌日、福島を離れたけれど、ビジネスホテル数軒、宿泊を断られました。あれから外に出にくくなりました。」

「郡山ナンバーの車が落書きされた。福島県内を車で走るだけでも、白い目で見られているような気がする。」

「私は子どもを連れて今すぐにでも避難したいが、おじいちゃんがさせてくれない。山下俊一教授が公民館に来て、外で遊ばせても大丈夫だ、と言ったのでおじいちゃんは信じている。」

「学校が授業再開したので、休み続けるわけにはいかない。」

「学校の先生に 20mSv について聞いても、文部省が大丈夫だと言っているから、という理由でとりあってくれない。」

次頁へつづく

つづき

「ホームドクターが移住してしまった。」
「もうすぐ始まるプールが大丈夫なのか、心配。」
「給食を食べさせないように弁当を作っているが、いつまで続くやら」
移住したいが、そこで仕事が見つからなければ暮らしていけない。」

清朝の分断統治の特徴をモンゴル人は「仲のよい犬の間に骨を放り込む」と言います。日常生活に放射性物質を放り込まれた福島市民は、健康被害以前に、人と人、人と社会の信頼が崩れていくことに苦悩していました。人と人の関係性の崩壊という外から見えにくい被害をモンゴルの人たちに伝えなければならなかったと思いました。

2011年8月5日、京大原子炉実験所の小出裕章が、事故後初めて福島で講演することになり、キャラバンスタッフも、講演会をサポートしました。

写真3 小出裕章大演説会 福島・日本・世界へのメッセージ



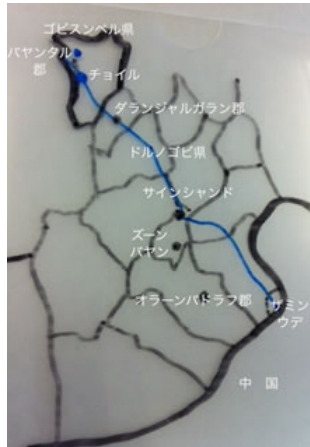
講演の後、市民がマイクを取り、様々な意見を表明しました。ある老人の言葉を下にまとめます。

「福島に生まれ育ち、農業以外に産業のない町に原発が来ることを聞いた時、若い人に雇用ができる、と喜びました。しかし、こんな事故が起こってしまいました。私は長年住んだ家も、田畑も捨てて、避難生活をしています。人間関係も崩れました。故郷を捨てなければならない苦しみ比べたら、電気がない暮らしに耐えることはできる。原発はいらない。心からそう思う。」

私は、この言葉をモンゴルの人びとに届けなければならなかったと思いました。

② バヤンタルへ

図2 バヤンタル郡の位置



8月、毎日新聞の会川記者が候補地の一つとして取り上げたドルノド県バヤンタル郡に行きました。バヤンタル郡は、ゴビスンベル県の北部、ウランバートルから舗装道路で180km。ここには北京とモスクワを結ぶ国際列車の駅があり、中国から陸送する物資が通る幹線道路がある。インフラは整っている。しかし、郡役場の建物は、旧ソ連軍と半分ずつ使っていた建物で、今は、電気もない。隣の経済特区チョイルに移住する人が増え、過疎化が進み、建物の荒廃が激しい。旧ソ連軍基地を何とか再開発したいという気持ちが伝わってくる所でした。

写真4 旧ソ連軍のアパート (撮影：今岡)



役場の前に座っている人たちに「核廃棄物処分場をここに作ると新聞で読んで、心配して来た」と毎日新聞の記事を見せて言うと、役場の事務長アンハーに会うようにと言ってくれました。待っていると、サングラスにグレーのスーツを来た若者が現れた。農牧業大学を卒業して間もない若手の事務長です。

写真5 バヤンタル郡役場前(撮影：今岡)



まず、彼は「核廃棄物処分場建設については、いろいろ取りざたされたが、政府や県から公式の話としては聞いていない」と答えてくれました。そして、「自分たちの生まれ故郷、これから子どもたちが生きていくのです。郡民あげて反対です。そのことは県知事に伝えています。」と言葉を続けました。私はまずほっとしました。

福島現状を話すと、彼は充分知っていました。名前を聞きませんでした。行政関係者が参加する核関連のセミナーがあったそうです。それには周辺のゴミ地域の郡、ドルノド県からも行政関係者が来ていて、誰もが核廃棄物処分場など、とんでもない、という意見だったと言います。政府は地方行政担当者にセミナーを開くほど、何かを準備しているようです。アンハーは、核廃棄物処分場について「ここには来ないと思う。おそらくドルノド県だと思う。ドルノドに行くつもりがありますか?」と聞かれたので、「行ってみたい」と即答しました。また、「自分たちには情報が必要です。日本語のままでも、誰かが翻訳するので、送ってください。あなたはモンゴル学者なのですから、モンゴル語で書いて送ってください」と言われました。私は安心して、しっかりと握手をして、バヤンタルを後にしました。

写真6 アンハー事務長と握手(撮影：今岡)



バヤンタル郡は交通インフラが整っている。生活インフラはソ連軍撤退により機能しなくなった。チョイルが経済特区になったことをきっかけに雇用を求めて移住する人が増え、過疎化に悩んでいる。郡としても若者の雇用、政府の集中投資による近代化を望んでいる。

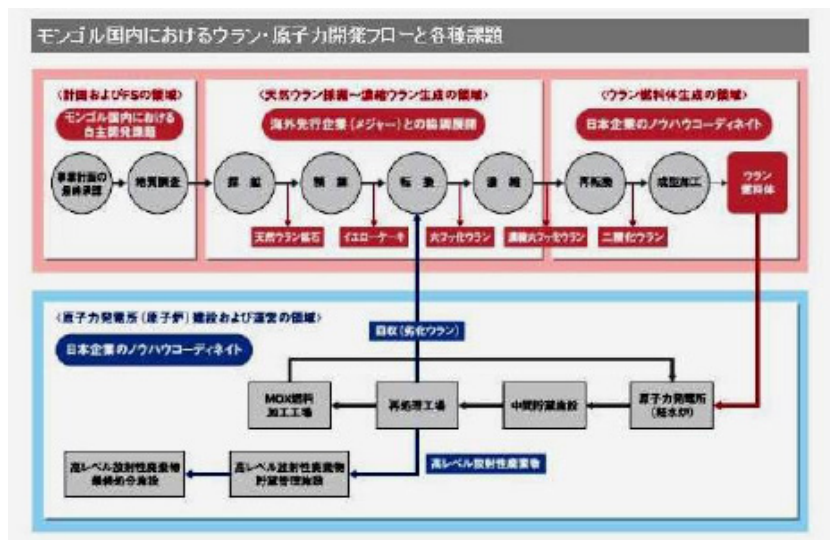
しかし、地元には核廃棄物処分場を受け入れてまで発展したいという民意が大勢ではないことがわかりました。また、モンゴル政府も、ウランバートルから近すぎるバヤンタルに核廃棄物処分場を建設しないだろうと思いました。

(2)そして、マルダイへ

マルダイが候補地と考える理由は5つあります。

- ① モンゴルの最も東、ウランバートルから東に600キロ以上離れていること。
 - ② 少数民族ボリアド(ブリヤート)族が住むところであること。これは、東京電力の原子力発電所を福島に建設するのと似た構造を想像させます。
 - ③ マルダイはモンゴル最大のウラン鉱山でもあります。モンゴル政府は戦略的鉱床の中でウラン鉱床を3つ定めた。その3つとも、マルダイ村周辺にあります。
 - ④ 2011年12月、日本の原発関連企業などに情報を提供するシンクタンクの原産協会が、「モンゴルの原子力発電導入状況とウラン鉱業」に関する報告をまとめています。
- この中でソ連時代にウラン鉱山として唯一開発されたドルノド県のマルダイのことが詳しく書かれ、注目されていることがわかります。
- ⑤ モンアトム・ジャパンという政府直轄の国営企業の日本支社が大阪にあります。ウランの開発から核燃料サイクル、最終処分まで、またインフラ整備のコーディネートを行う企業です。

図3 モンゴル国内におけるウラン・原子力開発フローと各種課題



(モンアトム・ジャパンのホームページより)

このモンアトム・ジャパンが、モンゴルから日本にウランを輸出し、日本から核廃棄物を受け入れるためのインフラ整備の地図を web サイトに掲載していました。そのモンゴル側の出発点が、ドルノゴビ県を中心地、チョイバルサンであり、マルダイから近いことがあげられます。

図4 ドルノド県都チョイバルサンから日本へのルート



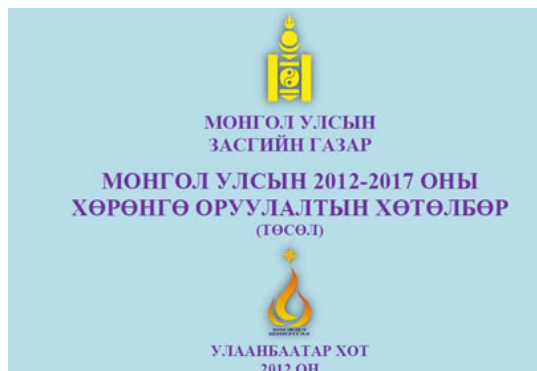
(赤字入りはゴロムト・オルグのホームページより〈原図はモンアトム・ジャパンのホームページ〉。)

モンゴル政府の核関連の事業を続けたいという意志も出たり、引っ込んだりしています。例を3つあげましょう。

① 2012年3月11日に、当時のバトボルド首相が来日、東北震災追悼集会に参加した唯一の外国人の要人でした。この時、当時の野田首相と話し合ったことは、外務省ホームページに要点がまとめられています。日本に出発する直前の共同通信のインタビューに対して、バトボルド首相はモンゴル発の原発を日本から投入する意欲を語っていました。英文の毎日新聞にもその記事が出ていました。しかし、来日後、共同声明や新聞のインタビューにも、ウランや原発という文字はありませんでした。

② モンゴルの各省庁から要求を出し、5月にバットボルド首相が全体を統括した「投資計画書2012年－2017年」の案、500ページ以上になりますが、1枚のpdfにまとめて、政府関連のホームページにリンクされました。それがモンゴルの反核運動家の目に止まり、「核廃棄物処分場建設」の証拠書類として公表する記者会見が行われました。

写真7 投資計画書の表紙



(出所： <http://cabinet.gov.mn/images/editor/files/NEGTGEL-1.pdf>)

この計画書は、部局案をバトbold首相が5月18日に政府案としてまとめたものです。500ページを超えるPDFにまとめられ、最初の説明のところでは、まったく核関連施設について触れられていませんが、最後の表に忽然と4つの核関連施設の予算がつけられています。

モンゴル政府 投資計画2012年～2017年 1T：1ドル：80円：1300T

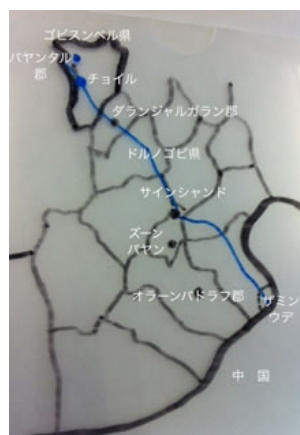
	計画内容	実施年度	予算	2013年	2014年	2015年
1	ダランジャルガラン郡で放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設建設(ドルノゴビ県)民間資本	2013～2014	50億T	20億T	30億T	
2	マルダイ村で放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設建設(ドルノド県)民間資本	2014～2015	50億T		20億T	30億T
3	放射性鉱物資源の保管、埋蔵施設と核化学実験所(アルダルトルゴイ)国費	2013～2014	10億T	4億T	6億T	
4	実験炉(ウランバートル市)国費	2013～2014	20億T	4億T	6億T	

出所 <http://cabinet.gov.mn/images/editor/files/NEGTGEL-1.pdf>

これは核エネルギー庁が作成した予算案です。具体的に3つの地名があげられています。ドルノゴビ県ダランジャルガラン郡、ドルノド県マルダイ村には「放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設」が民間資本で建設され、トゥブ県アルダルトルゴイには「放射性鉱物資源の保管、埋蔵施設と核化学実験所」を国費で建設する。さらに、ウランバートル市内に実験炉を国費で置く。

ダランジャルガラン郡とは、ゴビスンベル県のバヤンタル郡を過ぎ、経済特区のチョイルを過ぎ、ドルノゴビ県の入り口に位置する郡です。

図5 ダランジャルガラン郡の位置



チョイルの南北が放射性廃棄物処分場候補として名前をあげられるのはなぜか？今はわからないので、そのことを覚えておきたいと思います。

さて、この2つの郡の郡長や郡民は、このことを知っていたのでしょうか？

この50億トゥグルクというのは、この時のレートで換算すると、およそ3億円。これぐらいの金額で、放射性廃棄物、保管、加工、埋蔵施設が建設できるとは思えません。3億円で何をするつもりだったのでしょうか？人材育成や情報交流、キャンペーンのための費用だったのでしょうか。

③ 6月26日印刷と書かれ、7月4日、閣議決定された予算には、

	計画内容	実施	年度	予算	2013年	2014年	2015年
1	ダランジャルガラン郡で放射線測定施設建設(ドルノゴビ県)民間資本	2013～2014	50億T	20億T	30億T		
2	マルダイ村で放射線測定施設建設(ドルノド県)民間資本	2014～2015	50億T		20億T	30億T	
3	放射性資源の放射化学実験所(アルダルトルゴイ)国費	2013～2014	10億T	4億T	6億T		

同じ3つの地名でありながら、ドルノゴビ県のダランジャルガラン郡とドルノド県マルダイ村には、民間資本で、「放射線測定施設建設」と書かれています。予算は同じ金額です。トゥブ県アルダルトルゴイには「放射性鉱物資源の保管、埋蔵施設と核化学実験所」ではなく、「放射化学実験所」が建設されることになっています。予算は同じ金額です。杜撰な印象を受けます。

100万人を越える人口の首都ウランバートルに「実験炉」は建設しなくなったようです。京都大学の原子炉実験所ですら、京都になく、大阪の南端、熊取町にあります。この予算案を計上した核エネルギー庁の官僚は、自分が使う言葉の意味、中身、実態を知っているのでしょうか？大変疑問に思います。

5月18日に「放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設建設」と発表したものを、6月26日には「放射線測定施設建設」と書き換えました。これでは、机の上で仕事をする官僚が世論の反発をかわしたと言われても仕方ありません。

私は、「放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設建設」予定地から「放射線測定施設建設」予定地になったマルダイ村に行ってみたい。そこに住む人びとが、このことを知っているだろうか？どう思っているだろうか？という気持ちを強くしました。

翌年2012年8月13日、ゴロムト反核運動のメンバーで、マルダイのウラン鉱山ゴルバンボラクで放射線管理の仕事に従事していた若者レンスキーといっしょに、自家用車でマルダイに向かいました。

(2) マルダイへ

私にもそれなりの不安はありました。以前、金鉱山の町ザーマルに行った時、その長から、今すぐ出て行ってくれ、嗅ぎ回るな、と言わんばかりの扱いを受けたことがあります。ウランとなると、もっと厳しいだろう。

マルダイ村に行っても、柵が巡らされていて、中に入ることはできないだろう。きっと背伸びをして、中の写真を撮って帰ってくるのがおちだろう。

それでも、周辺に幕営する遊牧民からマルダイのことを聞くだけでもいいと思っていきました。今から思うと、無防備な格好で行ってしまったことを反省しています。

不安要素はありましたが、マルダイに接するバヤンドン郡を故郷とする知人が、応援すると言って

くれたので、出発することができました。いつもモンゴルの民族衣装を縫ってくれる元気な女性で、ボリアド民族出身。「核廃棄物処理場などできたら故郷を失う。ボリアド民族は滅びてしまう。」そう考えた彼女は、夏休みの帰郷を早めて、先にウランバートルを出発し、郡長は同級生だし、いろんな人を紹介しましょう、と言ってくれました。地元の人が受け入れてくれるなら滞在しやすい。彼女の日程にあわせて現地に入ろうと思いました。

(2.1) バヤンドン郡の中心地で

① A さんの木の家

13日朝8時、ウランバートルを出発。ドルノド県の中心地チョイバルサンには向かわず、ヘンティ県都のウンドゥルハーンを超えるとアスファルトの道からはずれ、車の轍を北上。21時、彼女の待つドルノド県バヤンドン郡着。車のメーターは665キロをさしていました。ボリアド民族の定住者は、木の家に暮らします。入り口を入ると土間があり、パンを焼いているおばあさん。彼女の母親です。ドルノド県では小麦を栽培しています。ドルノド小麦でもちもちとしたパンにツツギーというクリームをつけていただきます。手厚く迎えてもらって、最初の夜を過ごしました。

② バヤンドン役場の副長

14日、まず、バヤンドン郡役場に行き、訪問の目的を話しました。郡長は夏休みで県の中心地に滞在中、副長が応対してくれました。彼はモンゴル国立大学の物理学専攻。初めはとまどいながらも、こちらの話はすぐ理解してくれました。

また、原産協会の報告を研究生2人が翻訳してくれたので、そのコピーを渡しました。マルダイの詳細が日本語で書かれていることに驚いていました。

そして、副長自身、心配していることを話してくれました。

「自分の家畜は義理の父がマルダイから20キロのところで放牧していたが、3頭の家畜の肺が真っ黒なのを見て驚き、何か危険な状態にあるのではないかと郡長に話した。しかし、取りあってもらえなかった。その後、家畜はバヤンドン郡の北部に移した。」
「ロシアにウラン鉱を運んだ鉄道は、今は線路も撤去している。当時は、ウラン鉱を石炭と同じように覆いもせず輸送した。鉄道に沿った放牧地が安全なのかどうか、ずっと心配している」
「バヤンドン郡の役場、公民館、店舗、民家を建てるのに、マルダイの旧ロシア人労働者アパートや建築物を解体した建築資材を再利用し、現在も幼稚園を建てている。それが大丈夫なのか、ずっと心配している。」

副長は、心の中に閉じ込めてきたことを語ってくれました。打ち解けたところで、レンスキーは副長に提案しました。私たちがマルダイから帰ったら、公民館でフランス映画「ウラニウム」を上映したい。副長は、快諾し、支援してくれることになりました。バヤンドン郡の人びとと意見交換できそうです。

③ バヤンドン郡の家屋の放射線量

おばあさんの木の家に帰り、空間線量を計ってみました。0.2 μ Sv/時。ちょっと高いような、誤差のような数値です。隣の家はマルダイから建築資材を運んで建てたというコンクリートの家。0.4 μ Sv/時、おばあさんの家より2倍高い。途中で通過した隣のヘンティ県を中心地ウンドウル・ハーンは0.09 μ Sv/時でしたから、0.2という数字は、それより高いと言えます。

私は将来の核廃棄物処理場候補地を見ておきたいと思って、ここまでやってきました。しかし、すでに問題は始まっていることを知りました。マルダイ村を囲むようにウラン鉱山があります。バヤンドン郡とダシバルバル郡とセルゲレン郡、3つの郡の境界にマルダイ村があります。つまり、マルダイ周辺の住民は低線量被曝問題をすでに抱えているのではないかと、思いました。

④ ボリアド共和国に住むロシア人労働者

彼女の母は60歳。ロシア連邦に属するボリアド共和国のナーダム(祭典)は「アルタルガナ」と言い、昨年は7月20日頃アグアというところで開かれたそうです。母親はその時の話をしてくれました。

マルダイのウラン鉱山は2005年で閉山。地下鉱山の穴を塞ぎ、地上にあるものは黒いもの(鉛?)で覆い、そこで働いていたロシア人労働者はすべて帰国した。しかし、一部の労働者はモンゴルとロシアの間の境界地から出してもらえず、凍死した。なんとか、ロシア国境を超えた人はボリアド人の家で家事手伝いをして暮らしているのを見て何とも心が痛かった。

レンスキーによると、マルダイで働いていたロシア人労働者の中には、最も危険なところで働かされる囚人がいたので、そういう扱いをされたのだろう、と言いました。チェルノブイリの事故時にも囚人が使われたとモンゴル人はよく言います。スターリンの時代ではなく、ペレストロイカの後も囚人を労働者とするのか。大阪の釜ヶ崎から日雇い労働者が福島原発の処理をさせられたという記事がありました。古今東西、社会主義も、資本主義も、ウラン鉱山や原発の労働者はこんな目にあうのか。どこがクリーンエネルギーだ、と怒りを覚えました。

⑤ ロシア国境とバヤンドン間の道路

また、80年代にロシアにウラン鉱を運ぶために作った道路は、壊れてしまったが、一週間前から、ロシアからバヤンドン郡の中心地に向けて道路工事をしている。母は何度も首をかしげて言いました。「何かが始まっている」。

(2.2) マルダイ村へ

① ロシア人労働者のアパート群

今年のドルノド県は雨が多いそうで、道がぬかるみ、何度もスタックしそうになりました。途中、遊牧民の家で道を尋ねると、どの家にも太陽光パネルがとりつけてありました。草原の轍を走り、南下すると、こつ然と高層ビルが現れました。マルダイのロシア人労働者の宿舎です。窓ガラスはなく、天井はなく、床もない廃墟となっていました。空間線量は平均0.2 μ Sv/時。

写真8 廃墟となったマルダイ村（撮影：今岡）



このマルダイ村を管轄するダシバルバル郡で女性の医師が郡長をつとめていた2006年、時の首相エンフサイハンから郡の中心地をマルダイ村に移転するように言われたところがあるそうです。女性医師は当時を振り返り、放射線の危険性を知っているのに、どんなことがあっても移さないと拒否した、と言いました。その時の勇気はどんなものであったのでしょうか。その背景には、民主化運動のリーダー S. ゴリグのアドバイスがあったと医師は付け加えました。ゴリグがマルダイに郡の中心地を移してはならない、と強く支持してくれたとのだそうです。

写真9 廃墟となったアパート群（撮影：今岡）



② 家屋や商店、鉄道跡、工場跡

周囲にはロシア人が植えた白樺に似た広葉樹が育っていました。草原に立つアパート群と白樺の森、きっと美しい町だったのでしょう。ここには幼稚園、学校、公民館、お店、ないものはなかったと遊牧民が言いました。一戸建て住宅の並ぶ地域では、屋根や壁を解体し、トラックに積んでいる人たちがいました。上下水道も掘り出され、土管も、溝も、ふたもありませんでした。この風景は、市場経

済移行後、ネグデル関連施設がボロボロに解体され、建築資材としてリサイクルされるのを見て来た者としては驚くものではありません。しかし、中には放射線管理区域を示すマークをペンキで描いたドアを自宅の倉庫のドアとして再利用している家もありました。核廃棄物処分場は、フィンランドのオンカロでは10万年後の安全を想定して建設されるという映画がありました。モンゴルでは、30年前のソ連の建物や上下水道、電柱まで外して再利用するのですから、10万年後の安全を保障することはできないと思いました。

鉄道跡は草が覆い、こんもりとした長い丘になり、のぼってみると、有刺鉄線の一部が落ちていたり、サビで真っ赤になった線路の敷き石があったり、そこで線量を計ると $0.36 \mu\text{Sv}$ でした。線路はロシアの方角からウラン鉱積地まで伸びていました。

住宅地から離れると、車両関係の倉庫や整備場だったと思われる建物の頑丈な基礎があちこちにありました。壁や屋根、土管などはありませんでした。

そこからどんどん奥に入っていきました。柵もありません。白人の観光客らしき人が通訳と遊びに来ていました。

③ ウラン残土の山と鉱滓ダム

ウラン鉱の残土の山には、黄色い看板が建てられていました。英語で書かれているので、遊牧民には伝わるのでしょうか。社会主義の時代、ここを訪れた日本の地質学者はこの黄色い看板を見なかったと言います。西側の資本がマルダいの探査権を得た後で、英語の看板を立てたのでしょうか？ロシア人労働者がここを出る時には、黒いもので覆っていたそうです。モンゴル人がそれを持ち帰り、肉などの食品を包むのに使ったと言われています。

写真10 ウラン残土の山



レンスキーがこのウラン残土の山の裾で線量を計ると、すぐに警告音が鳴り、 $5.8 \mu\text{Sv/時}$ を指しました。私たちは恐れをなして、すぐに車に戻りました。冬にフリージャーナリスト西谷文和がここを訪れた時、彼はぼた山をかけ上がりました。線量計は $24 \mu\text{Sv/時}$ を指したと聞きます。

写真11 線量計5.8 μ Sv/ 時



(写真提供：Anti Nuke Movement Mongolia)

しかし、私が訪ねた飯館村は役場の近くで7 μ 、田んぼで10 μ 、浪江町との境界の長泥では25～30 μ Sv/ 時を指したことを思い出しました。福島はウラン鉱山の残土よりも空間線量が高い。放射性ウランを濃縮した燃料が原子炉から飛散したのですから高いはずです。

自然界にある放射性ウラン235は1%に満たないので、それを集めることを濃縮と言います。ウラン鉱山、特に残土にはウラン235はより少なくなっています。事故現場と比較するものではないかもしれません。

ウランバートルに戻り、大阪大学の物理の専門家に聞いたところ、ウラン鉱山ではラドンガスが発生し、ウランやトリウムのマイクロ粒子が飛ぶので、肺に吸い込まないようにして行くべきだったと注意されました。

写真12 鉱滓ダム (撮影：今岡)



その近くには巨大な鉱滓ダムがありました。この乾燥した大地のどこにこれだけの水があるかと思うほど、巨大でした。ここでウランの露天掘りをし、残土を捨てたそうです。

④「ウランを掘り出してはならない。」

マルダイ村の近くに夏営している牧民に家畜の異常がないか聞きました。自分の家畜に起こっていないし、他にも聞いたことがないと言いました。私たちは先を急ぎ、帰りにも寄りました。すると、羊を屠殺し、夕食の用意をして待っていてくれました。骨付きあばら肉の塩ゆです。その夜は、そこで泊まることにしました。1000頭の家畜を飼う優秀牧民で、太陽光パネルを持ち、TVと灯りがついていました。聞くと、このあたりで、太陽光パネルをもたない遊牧民はおらず、みな、家畜を増やして、電化を進めていました。ボリアド族の彼は、民族の歌を歌ってくれました。レンスキーはバヤンウルギー県で覚えたというカザフの歌を歌ってくれました。星空の下、草の上に座り、宴を楽しみました。

核廃棄物処分場の問題は、そういう話があるということを聞いたことがあるけれど、公には聞いたことがない、と遊牧民が言いました。そして、

「私は、放射線がどれぐらいなら大丈夫とか、危ないとか、そういうことはわからない。しかし、広島の前爆については学校で習ったし、自分で本も読んでみました。ウランは唯一核兵器の燃料です。だから、私のふるさとの大地から掘り出してはいけない。私が言えるのはそれだけです。」

私はこの時、大地に生きる遊牧民の思想に出会ったと思いました。マルダイまでやってきて、よかったと思いました。

祝島の原発反対運動が30年以上も続いたのは、海に根ざした生活があったからです。草原に根ざす遊牧の生活がある限り、マルダイ周辺の人々は核廃棄物処分場の受け入れに反対するだろうと思いました。

この時の動画を7分にまとめました。こちらをご覧ください。

<http://www.youtube.com/watch?v=Y39oaVhCm4M>

(2.3) マルダイからバヤンドン郡に帰って

① 副長と話す

マルダイは封鎖されていると思っていましたが、草原にこつ然と現れる町で、誰でも、家畜でも、どこからでも入れる状態になっていました。5.8 μ Sv/時のホットスポットもあります。風は強いです。廃棄物再利用者とその車が入り出し、放射能で汚染された物を運び出しています。

レンスキーは「これはS.O.S. MARDAI!」と言いました。このまま放置してはいけない、と私も思いました。周辺住民の健康を低線量被曝から守らないといけない。そのためには専門家による本格的な調査が必要です。副長に話したところ、ずっとそう思っていたと話してくれました。

また、マルダイに「放射線測定所」を建設すると目的を書き換えられた「同額」の予算が、7月4日に閣議決定された。そのことを知っているかと副長に聞いたら、初耳だと驚いていました。地元の説明もせず、核関連の施設を建設するとはどういうことなのでしょう。

8月18日の「ウヌードル」紙は、国家発展計画委員会の説明を掲載し、この投資計画では病院などから出た放射性廃棄物を保管する場所を作るということでした。

繰り返しになりますが、5月18日に「放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設建設」と発表したものを、6月26日には「放射線測定施設建設」と書き換え、7月4日には閣議決定されました。それが、8月18日には国家発展計画委員会が「病院などから出た放射性廃棄物を保管する場所」を建設すると、また目的が変わりました。マルダイ村には電気も、上下水道もないので、ここに放射線測定施設を建設し、研究者や職員が働くことは想像できません。むしろ、鉱山ではなく、事業所から出た少量の放射性廃棄物なら、ウランの残土周辺に一時保管することは可能かもしれません。

それにしても、地元への説明は義務です。放射性廃棄物はウランバートルから長距離輸送され、ここまでやってきます。

副長と話し合いました。とにかく、あのウランのぼた山には人や家畜が近づかないよう、柵をしなければならぬ。マルダイに何か建設されるらしく、それは、今の時点では病院の廃棄物を保管するレベルの建築物かもしれません。しかし、モンゴル全土でウランの探査採掘が行われているので、そのうち、残土の処分地が必要になります。一旦、保管したところを拠点に処分場ができるかもしれません。そしてさらに、8月7日の「ウォール ストリート ジャーナル」によるとアメリカ政府は、核廃棄物処理場問題が解決しない限り、原発の新規建設を凍結すると報じていました。原発関連企業はちまなこになって処理場を探すでしょう。マルダイにはすでに地下400メートル以上の深さで11キロに及ぶ坑道があると住民が言います。やはり、ここが核廃棄物処理場になる可能性は否定できない。

そうならないように、投資計画の予算を地元のためにひっぱってくる必要があります。すでに住民は放射能で汚染された建築資材を再利用して暮らしています。低線量被曝問題から住民の健康を守るために、放射線測定所を無人のマルダイ村ではなく、郡の中心地の病院に作るべきではないか、という話になりました。

② 映画上映の後、

バヤンドン郡の文化会館でフランス映画「ウラニウム」の上映会を行った後、化学の先生がマイクをとりました。

「数年前、マルダイのウラン鉱山の危険性を話したら、みんなに、気にしすぎると馬鹿にされた。30年後にがんになるという話をしても、寿命の短いモンゴル人は、今から30年は生きられるんだから大丈夫だと思ってしまう。体がだるいとか、病気になりやすいとか、影響を受けるのだが、忍耐強いのでそのまま過ごしてしまう。ウランの問題は貧困問題と結びついている。モンゴルには4000万頭の家畜がいる。すべての鉱山を閉鎖しても、私たちは飢えることはない。今日の映画を見て、私は自信を持った。地元で闘わないと、誰が守ってくれるのか。子どもたちのために、この大地を守るために、反対運動の先頭に立ちたい。」

心の中に閉じ込めていた思いがあふれ出て、他の住民は拍手で答えました。住民は立ち上がり始めました。

(2.4) マルダイで気になったこと

「ウラニウム」という映画を上映した時、奇妙なことが起こりました。2人の男女がレンスキーと私、観客の市民の写真を至近距離で撮り始めたのです。まるで威嚇するような不快な取り方です。バヤンドン郡の副長はその2人を自然環境の調査をしている人だと紹介してくれました。彼らは、マルダイの再開発に際し、自然に負荷をかけないようにアドバイスするための調査を行っていると言いました。辺野古に米軍基地を新設するために行うアセスメント調査のような仕事なら、推進派なのかな、と思いました。私たちの調査の結果を知りたいし、彼ら自身の結果を紹介したいと言いました。残念ながら時間がないので、ウランバートルでまた会いましょう、と電話番号を交換しました。

その2人を観察すると、マルダイに隣接する第4バク長をぴったりはさむように座り、歩いています。バク長が映画の後、

「何らかの施設がマルダイにできたら、若者の雇用ができるので期待していた。映画を見て、ウラン鉱山を抱えるアフリカの村で低線量被曝の問題、労働者の被曝の問題を抱えていることを知り、マルダイの再開発は、むしろ、やめた方がいいと思うようになった。」と言いました。

副長は、映画の後、明日の朝、郡長に会って、放射線の測定値を報告してほしい、と言いました。この2人が分厚い調査報告をまとめたので、明日、郡長に説明することになっている。その前にマルダイでの測定結果を話してほしい、ということでした。彼はすぐに郡長に電話をし、9時半に会う約束を取り付けてくれました。

翌朝、9時半になっても郡長は役所に来ませんでした。副長は心配して、郡長宅に電話しましたが出ないので、自宅に向かいました。すると、昨日の2人がバク長といっしょにジープに乗って役所に来て、「9時に郡長に会うことになっている」と言って中に入って行き、いないのでまたジープに乗って消えて行きました。もどってきた副長によると、郡長は昨日遅く帰ってきて、友人と酒を飲んで、体調が悪いので、今日は休む、ということでした。こういうことはよくあることなのですが、副長の残念そうな顔が心に残りました。

(3)「マルダイから帰って」に続く

(いまおか りょうこ)